

北海道総合地質学研究センター 第 13 回研究セミナー 記録

日時：

2019 年 10 月 20 日 (木曜) 14:30-16:00

開催場所：

かでの 2.7 北海道立道民活動センター 1010 会議室 (札幌市中央区北 2 条 7 丁目)

講演者：

高波鐵夫 (北海道総合地質学研究センター)

講演タイトル：

2018 年 9 月 6 日北海道胆振東部地震をレビューする

講演要旨：

北海道胆振東部で昨年 9 月 6 日 北海道観測史最大の規模 M6.7 が発生し、この地震で初となる震度 7 が厚真町で観測され、安平町・鶴川町で震度 6 強、千歳市・日高町・平取町・札幌市東区で震度 6 弱が観測されました。震源から 80 km も離れた札幌市では、今も大規模な地盤災害の爪痕が残っています。また地震調査研究推進本部が「わが国の主な活断層の中では、発生確率がやや高いグループに属する」と評価した A ランクの石狩低地東縁断層帯南部付近でこの地震が発生しましたが、地表の断層がずれた形跡はなく、活断層の走向と余震域の走向もずれていることなどからこの活断層と今回の地震との関連はよくわかっていません。さらに内陸の大地震は通常 10~20 km の深さで発生しますが、今回の震源域周辺では例外的に深さ 30~40 km で規模の大きな地震が発生しています。一方「千島前弧スリバー」と呼ばれる巨大な地質構造ブロックが西進し、中央北海道で東北日本弧と衝突することにより、日高山脈は現在も西に湾曲すると同時に隆起を続けていると見られ、日高地方の深部は強い圧縮場となっていて、今回の地震はこのような構造の中で発生したとの考えがあります。そのような現状で新しい観測による結果も報告されてきました。まだ未解決な問題も残っていますが、すでにこの地震から 1 年が経過しました。当センターの研究セミナーでこの地震を議論する好機と考え、とくに地震学の視点からレビューを試みます。

参加者：

15 名。内訳：会員 13 名 (高波鐵夫, 前田仁一郎, 高田忠彦, 吉岡正俊, 岡 孝雄, 嵯峨山 積, 岡村 聡, 在田一則, 中川 充, 松田義章, 宮下純夫, 山岸宏光, 関根達夫), 会員外 2 名

研究セミナーの進行は 宮下純夫がつとめた。発表終了後に活発な議論が行われた。